

明治知識人の東西文化理解と漢字使用

—— 明治初期の漢字・漢語を例に ——

Meiji intellectuals' understanding of East-West culture and the usage of Kanji
— Examples of Kanji and Kango in the early Meiji period —

宗近 水穂

Mizuho Munechika

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 国際文化専修

キーワード : 漢字使用, 明治時代, 文化理解

Key words : usage of Kanji, The Meiji Period, Cultural understanding

1. 研究目的

東アジアには「漢字」を共通としたアイデンティティがある。これは東アジアの文化圏が中国で発生した漢字を媒体として成立したこと、漢字が第二次世界大戦前後まで東アジア各国の共用文字であったことなどからいえるだろう。

日本語の語彙は江戸時代末期から明治時代にかけて大幅な更新が行われた。これが西洋文明を全面的に導入した時期と重なり、主に明治期の日本の知識人が漢語をもって日本語の中に取り入れた。

本研究では、日本語の過渡期である明治初期に書かれた『米欧回覧実記』(以下『実記』)を通じて、明治知識人による漢字使用が西洋文化の吸収や東洋文化の伝承にどのような役割を果たしているかを実証し、その傾向性を明らかにすることを目的とする。このことによって漢字を表記としての道具だけでなく、文化の吸収や伝承、東アジア文化圏のアイデンティティとの関係における役割を考え、日本語の漢字使用の意味を捉えなおす。

本研究では、『実記』を中心とした資料に基づいた実証と比較分析を主な方法とする。

実証にあたり、『実記』の一般的な漢字使用をみるため、第 82 巻における普通名詞、地名・人名、専門用語の表記を、漢字の構成やその意味、また漢字・仮名・振り仮名の関係をみながらその特徴を考察する。そして、語彙の単位を越えた表現に漢字がどのような役割を果たしているのかを明らかにするため、文化比較、典故などを使った表現を抽出し、その傾向性を考察する。

比較分析にあたり、『実記』原文における漢字使

用の意味や特徴をみるため、水澤周氏による『現代語訳 米欧回覧実記』(慶應義塾大学出版, 2008)との検証を行い、現代語にどのように反映されているか、その関連性を明らかにする。

2. 研究実施内容

資料として扱う『実記』が書かれた時期における日本語の状況を把握するため、まず日本語と漢字の歴史や近代日本の漢字使用を概観した。日本では独自の文字(仮名)をもつようになって、長い間漢字(漢文)が正式な文章に用いられ、明治近代においては漢文を書き下した形である訓読文・訓読体が公式文体として使用されるようになった。また国字国語問題や辞書の整備など明治期の日本語は転換期を迎え、このような日本語の状況下において『実記』は漢字・漢語を多用した漢文訓読文で記述されている。

『実記』の例言に、仮名は誤解が生じやすく、漢字を用いるのは誤解を防ぎ、視覚的に明らかにするため、と述べられており、ここに筆者久米による漢字使用の方向性を見ることができる。

実際に『実記』の表記には、文物・概念に対する表現の正確さや、専門的な名称の明確さよりも日本語の揺れや漢字の表意性を利用しながら、意味や様子を描写しようとする工夫がみられた。そして筆者久米によって伝統的な漢語から革新的な漢語までを使用しながら表記されていることが確認された。

例えば普通名詞は、それぞれの国、また個人によって認識の異なる文物の名称だが、当時の日本

の書物に用いられていた西洋の新しい概念語や、中国語を参照したとも考えられる漢語があった。また日本語の意味の補足や漢字の意味の特定、そして原語の音を表すための振り仮名が振られた漢字表記もみられた。

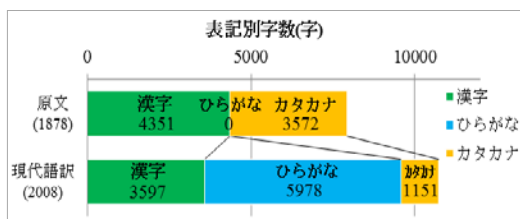
地名・人名は、本来外国語、つまりアルファベット表記の語が意識、音訳され漢字表記になっている。漢訳洋書や英華字典を参照したと考えられる漢字表記に振り仮名が振られていることも多く、このような表記手段がとられていたのは、漢字によって既存概念を連想させ、仮名で実際の外来語の音や意味を補足するためだと考えられる。

専門用語の場合は基本的に振り仮名が振られておらず、そのものを正確に表すのではなく、形容した漢字で表記されている。これは久米自身がそれぞれの専門的な知識をもっておらず、また専門的な技術を表す文物を読者にある程度理解してもらえればよいと久米が判断したためだと考えられる。このように筆者久米によって伝統的な漢語から革新的な漢語までを使用しながら表記されていることが確認された。

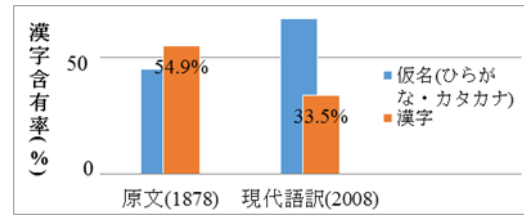
久米の漢学の知識が多く利用された表現には、読者に共有されていた自国の文化、あるいは東洋文化についての知識を利用し、西洋文化と比較しながら記述することで理解を促進させる手法をとっていた。

さらに『実記』原文と現代語訳の表記別字数と漢字含有率を調べた結果、それぞれグラフ1とグラフ2になった。

[グラフ 1] 『実記』第 82 巻における表記別字数の変化



[グラフ 2] 『実記』第 82 巻における漢字含有率



これらのことから、現代語訳より原文の方が文字数は少ないが、漢字含有率が高いため、原文で使用されている漢字は、現代の漢字より多くの情報量をもっているといえる。

そして現代語訳との比較分析から、原文の漢字には、より多くの文化伝達機能や背景知識を連想させるような辞書的機能があり、また明治知識人はその漢字の表意性を自在に駆使していたと考えられる。

以上のことから、明治初期の漢字・漢語は日本文化のあり方や中国文化を日本語で表記する機能を果たすだけでなく、西洋文化の解釈を表現する文化伝達の役割をも担っていることが示唆された。そして明治知識人による漢字使用は、日本語の近代化だけでなく、和漢洋の文化を吸収・融合・伝承するという日本的な近代化にも不可欠な要素となっていた。

3. まとめと今後の課題

本研究では、久米邦武を明治知識人の一人としてみてきた。今後の課題として、『明六雑誌』など他の同時代の知識人による文献においても同様の漢字使用の傾向にあるのか、分析する必要がある。また現代日本語の中の漢字使用のあり方と文化的な関係について、さらに考察を深めたい。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成 29 年度「大学院生研究助成(B)」(課題番号 DB2933)を受けたものである。